生涯学習情報誌
フォンズ
No. 72
2014年９月25日
発行

常陸太田市フォンズ・ネットワーク
事務局 常陸太田市生涯学習センター内
〒313-0061
茨城県常陸太田市中城町3280番地
TEL：0294（72）8888
FAX：0294（72）8880

水辺の詩（画・沼田 久雪）

水の想い出 ⑦⓪

常陸太田市街地の西側を流れる源氏川は、今でも木橋が架かり昔ながらの自然景観、風情が残されています。春の堤防には様々な草花などが咲き、夏から秋にかけてはアシがおおってゆるやかな流れの水辺には、光と影のコントラストの様々な模様が映し出され、特にアシなどが生茂った時期の夕刻、朝の風景は古き時代にタイムスリップしたような歴史的な時間空間を感じることができます。絵画制作は楽しいことですが、一方、長年描いているとマンネリに陥り、また壁にぶつかり、この壁をのり越えるためには苦しみを伴います。常に自分との戦い、また、何を描くか、モチーフ探しの旅でもあります。このような苦しみの中で、近年、私の絵画制作の大きなモチーフとなったのがこの源氏川です。孫の保育園への送り迎えの際に休憩場所であった源氏川の水辺で鯉などの魚が作り出した波紋やコントラスト、水面の動きに音楽の旋律を感じ、水が奏でる響きを絵画的に表現したいと思って新たな作品の制作に取り組んできました。それから３年が経過して日常の何気ない身近な光景から生まれることの大切さ、重要さを改めて痛感しています。市内には、滝、溜池など様々な自然の水辺空間があります。この水辺を通して人とのかかわり、産業、植物、生物が育まれてきたこと、水は命のみなもと、環境の美しさのバロメーターであることを決して忘れてはならないと思っています。

（沼田　久雪）

フォンズとは、ラテン語で泉の意味です。とぎれることなく新鮮な情報がお届けできるようにと名付けられました。

わたしたちの10周年 10th 常陸太田市

新生常陸太田市と私たちの10年

常陸太田市は平成16年(2004年)12月の「平成の大合併」によって常陸太田市と金砂郷町、水府村、里美村が1つになり茨城県内最大の面積を誇る市となり、今年は、合併して10年目を迎えます。

今回は、新生常陸太田市の誕生とともに、10年を歩んできた市内のグループ、団体、学校などをご紹介いたします。皆様の10年はどのような10年だったでしょうか。

（武藤　卓・武藤　千絵子・塩原　慶子）

のぞみ幼稚園 10周年記念式典

平成16年度に機初幼稚園、佐都幼稚園、河内幼稚園が統合してのぞみ幼稚園となり、その後23年度に西小沢幼稚園が編入されました。

開園当時は161名いた園児、現在は98名となりました。「豊かな心を育むための遊びや生活の充実」を保育目標に揚げ、明るく元気で、一生懸命取り組む健やかな園児の育成を目指しています。

（園長：古平　均）

２月１日幡町にあるのぞみ幼稚園10周年記念式典が行われました。

園長先生が編集した10年間の幼稚園の様子の映像が流れ、創立記念日（２月３日）と同じ誕生日の園児の誕生会等が行われました。その時、登場したバースディケーキは、とても大きく手作り感あふれるもので同じ誕生日の園児が、「えい！」と引っぱるとろうそくが灯るユニークなケーキでした。

想い出いっぱいの映像が流れるたびに「わぁ!!」と大きな歓声があがりとてもにぎやかな式典でした。

（武藤　千絵子）

「そばとぴあ水府をめざして」水府愛農会

水府地区で常陸秋そばを栽培する農業法人「水府愛農会」は、元小学校校長、元銀行員などそば好きの地元の有志5人で立ち上げた農業法人です。遊休農地の再生、常陸秋そばの栽培・生産・直売に取り組んでいます。

旧水府村時代の平成10年から、これからの村のあるべき方向を考える「水府みらい塾」という勉強会が開かれていました。その中で、水府の特産物で村おこしをしようと熱く語りあった15人ほどが集まり「水府そば愛好会」が発足となりました。その後、現在の5人で平成15年に農業法人を立ち上げ、「水府愛農会」として生まれ変わりました。年々高齢化していく地域の中で、近隣のおじいちゃん・おばあちゃんから「うちの畑も作ってくれないか」と声をかけられることが増えています。「黙って見過ごす訳にはいかない愛村精神と、村の特産物である『水府産常陸秋そば』を評価していただき、楽しみに待っていてくださる全国のお客様の顔が想い浮かび、今では15haを耕作しています。栽培技術の向上と作業の効率化を図り、更に安定した品質と高品質なそばの供給をし、多くの皆さんとの楽しい交流をしていくこと『そばとぴあ水府をめざして』頑張って参りたい」と取材に応じていただいたメンバーのひとりである和田範政さんは話していました。　（武藤　卓・塩原　慶子）

第10回 常陸太田ボランティアまつり

常陸太田市総合福祉会館いっぱいに繰り広げられる「ボランティアまつり」。いつもは整然とした通路にフリーマーケットのブースが並び、活気あふれる声がひびきます。ボランティアグループによるおいしさ自慢の品々を毎年楽しみにしている人も多いと思います。今年は、ボランティア団体等による各種体験・発表・展示のほか、県立太田第一高等学校・太田第二高等学校・佐竹高等学校各校JRC部とのコラボ企画も実施します。

日　時　平成26年12月７日（日）
午前９時～午後２時
※フリーマーケットと同時開催／雨天実施／入場無料

場　所　常陸太田市総合福祉会館
（〒313－0041 常陸太田市稲木町33）

問合せ　常陸太田市社会福祉協議会
TEL.0294－73－1717

おおた窯「陶魂クラブ」

平成16年9月に（財）グリーンふるさと振興機構の企画で、約50名のボランティアが集まり、増井町の自然休養村管理センターで穴窯つくりが始まりました。毎週土日に集まり作業を進め、「穴窯作りというよりは土木作業だった」と当時のメンバーは振り返ります。最も重要な煉瓦つみも地元のタイル屋さんにボランティアでお願いして、平成17年1月にやっとの思いで完成した「おおた窯」。県の工業技術センター窯業指導所で所長をしていた諏訪幸雄さんを中心に行ってきた穴窯作り、その諏訪さんを主宰に「陶魂クラブ」が発足しました。

毎月メンバーが集まり半年間かけて薪割りから準備します。木出し→薪づくり→陶芸作品づくり→作品の窯詰め→焼成→窯だしという全工程が体験でき、6月と12月の年に2回、それぞれの作品を持ち寄り窯焚きを行います。メンバーが当番制で6時間交替、4日間かけて作品が焼きあがります。昨年度で窯のある休養村管理センターが閉館となったのに伴い、窯も閉鎖が決まりました。今年6月には陶魂クラブとして最後の窯入れが行われ、大きな炎があがるのも見納めとなりました。

取材に行った日は、あいにくの雨でした。にもかかわらず、窯に薪がくべられる度に、煙突からは、炎が高々と燃え上がり、辺りを明るく照らし出し、なんとも言えない圧倒される光景でした。

6月28日には、窯出しが行われ、皆さんそれぞれの思いを込めた作品ができ上がりました。 大勢の人の手によって支えられてきた「おおた窯」、はじめて足を踏み入れた私達にもそれを実感させてくれました。

（武藤　卓・武藤　千絵子）

常陸太田市美術協会 10周年記念展

長年絵画展が開かれていたのに10周年？と不思議に思いながら常陸太田市美術協会会長 佐々木弘明さんにお話を伺ってきました。

旧太田町時代より、この地に疎開していた、洋画家榎戸庄衛氏の提唱により設立された常北美術展（昭和23年）があり、およそ半世紀の長きにわたって美術文化の発展向上に多大の貢献を果たしてきたそうです。市の合併を契機として常北美術協会も新たに発展、飛躍していこうと気運が高まり、市美術団体設立準備会を設置、平成17年10月9日に市美術協会が誕生しました。節目の年を迎え、10月に市民交流センターにて10周年記念展が開催されます。

日時　10月13日(月・祝)～19日（日）
　　午前９時～午後５時(最終日は午後３時閉館)
　　※14日（火）休館
場所　市民交流センター
　　多目的ホール・小会議室(入場無料)

記念展としては、会員作品の展覧をはじめ、会員・招待作家の小作品がチャリティとして販売されるそうです（収益金の一部を市関係寄付）。常陸太田アーティスト・イン・レジデンス事業により市内に移住し活動している３名の若手芸術家も招待され作品を展示する他、パルティホールの芝生広場にてスタードーム制作やワークショップなども開催される予定です。例年にも増して、見応えのある作品を是非ご覧ください。

特別企画！
10月18日
①午前10時 ②午後２時
美術協会作家と招待作家
による
ギャラリートーク
開 催 ！

生涯学習情報誌「フォンズ」は、2～3ヶ月毎に発行し、市内全世帯に配布され、大きな宣伝効果が期待できます。ぜひご利用下さい。

◆広告を募集している情報誌
平成26年12月から平成27年4月に発行予定の生涯学習情報誌「フォンズ」第73号～第75号

◆広告料（1回あたり）※会長が指定するページの最下段
① 縦4.5cm×横 8.8cm／10,000円
② 縦4.5cm×横17.9cm／20,000円

問合せ　フォンズ・ネットワーク事務局（生涯学習センター内）　TEL:0294-72-8888　URL:edu.city.hitachiota.ibaraki.jp/gakushu

常陸太田市合併10周年記念事業

Hitachiota 10th

つながる思い　果てない未来

上記「シンボルマーク及びキャッチフレーズ」は、市に申請し、許可を得ることにより、市民・市民団体等も無料で使用することができます。

12月に合併10周年を迎えるに当たり、将来に向かって「夢」と「希望」、そしてさらなる「飛躍」につなげることを目的に、多くの「合併10周年記念事業」を開催しています。今後も、記念式典など多くの事業の開催を予定しています。

申請・問い合わせ先
常陸太田市役所政策企画部企画課
TEL0294-72-3111(内線347)

合併10周年記念式典

10周年という節目を迎えるにあたり、市民の皆様と10年間の歩みを振り返るとともに、さらなる一体感の醸成を図るため、記念式典を開催します。

開催日時　12月6日（土）　午後1時～
開催場所　パルティホール
内　　容　各種表彰やパネルディスカッション、市内小中学生のふるさと再発見事業展示など

合併10周年記念「ふるさと放送局 in 常陸太田」

秋のイベント「常陸秋そばフェスティバル里山フェア」が行われる山吹運動公園内で茨城放送による公開生放送を開催します。パーソナリティはマシコタツロウさん、アシスタントはアナウンサーの柴田明子さんを予定しており、当日はイベント中継や市内の情報の放送が行われます。

放送時間：11月9日(日)
午後1時～4時

公開生放送風景

★公開生放送では、マシコタツロウさんが放送している様子を間近で見ることができますよ～！

茨城放送HP　http://www.ibs-radio.com/
茨城放送は、水戸1197kHz、土浦・県西1458kHzで茨城県内をカバーするラジオ放送局です。

原点回起 7

「であいときっかけ」

中学時代はサッカー部で、高校の時もサッカー部に誘われましたが、中学の美術の成績が悪く、それがとても悔しくて高校へ行ったら絶対に美術部へ入ろうと思っていました。絵は上手ではないのですが、そのころから自分でいろいろとイメージを膨らませ、考えて作ったりするのが好きでした。

高校の美術部の顧問の先生が担任でもあり、藝大出身でした。授業中「将来の夢」という作文で映画監督になりたいと書いたのですが、それを読んで先生は面白い生徒だなと思ったそうです。「藝大を受けてみてはどうだろうか？」と先生にすすめられ、油絵を始めました。

夏休みや冬休みは東京の美術系予備校に通い、受験に合わせてデッサンやF15のキャンバスサイズ（新聞紙を広げたよりやや小さい程の大きさ）の絵を2日に1枚のペースで描いていました。

その後、現役合格とはいきませんでしたが、念願の東京藝術大学に入学、卒業後個展を銀座などで数回行いましたが、いつしか絵から遠ざかっていました。油絵をあんなにたくさん描いていたのに、今は全く絵筆を握ることなく、WEBサイトのデザインの仕事をしています。思うことあってアート活動を休止していましたが、そろそろ再開しようと思っています。

油絵に出会ったのは、先生の勧め、10年ぶりにアート活動を再開しようと思い立たせてくれたのも、常陸太田での人との出会いでした。きっかけは、自分が呼び寄せているのでしょうか？それとも向こうからやってくるものなのでしょうか？10月に地元では初めての個展を開催予定です。

（武藤　卓）

リレーエッセイ「思い出の絵本」 『からすたろう』 ～70～

（棚谷町　半澤　勝子）

当時5才と3才だった孫が熱を出し、共働きの娘夫婦の帰りを待ちながら読んだ本です。孫達は熱のある、だるそうな目を向けて聞き入っていました。読み終わると、ひとしきりカラスの鳴き真似をして、また少し寝ては、起きると「カラス読んで!!」と何回も読みました。

ちびと呼ばれた男の子は、クラスでひとりほっておかれ、いつもクラスの尻尾にぽつんとくっついていた子で、うすのろ、とんまとも呼ばれていました。ひとり、のけものにされたちびは、退屈しないで一人で楽しむやり方を見つけ出し、耳をすませていろんな音を聞いたり、虫や自然をじっと眺めて過ごしていました。ちびが6年生の時、新しく受け持ちになった磯部先生は、学校の裏の丘の上によく子ども達を連れて行き、ちびが野山のことをよく知っていることに感心しました。その年の学芸会で、先生はちびがカラスの鳴き真似をすると発表し、みんなは驚きます。ちびはいろいろなカラスの鳴き声をまねして聞かせました。赤ちゃんカラス、お母さんやお父さんカラス。カラスが嬉しくてたまらないときにはどんな風に鳴くのかも見せてくれました。

磯部先生は、ちびがカラスの鳴き声がなぜできるようになったか説明します。日の出と共に家を出て日没に帰り着くという遠い道のりの村の学校に、6年間一日も休まず通ったことも。絵本から思いを留めたことが二つあります。どんな環境でも自然の中に自分を置いて育った子どもの心のさわやかさと、人の良い点を見つけ、それを築き上げるという仕方で人に接する大切さ、このふたつがとても心に残りました。

孫が2年生になったとき、ずぶ濡れで帰ったことに娘が怒ると、「Aちゃんの方が、僕の家よりずっと遠いから、傘かしてあげたの。急いで走ったけど、濡れちゃったの」その声を聞いて、思い出したのは「からすたろう」でした。

ほっとひといき ヒガンバナ・彼岸花（ヒガンバナ科）

ヒガンバナ（町屋町）

お彼岸の頃に花が咲くことからこの名前がつけられています。稲刈り後の“おだがけ”と真っ赤な花の組み合わせは実に印象的です。別名の「曼珠沙華」は、法華経などの仏典に由来し、「天上の花」という意味です。

この植物、もともとは中国原産で、土に穴を掘る小動物を避けるために有毒な球根をあえて持ち込み、畦や土手に植えたとも考えられています。

ところでヒガンバナは葉っぱがある時には花が咲かず、花が咲くときには葉がありません。その理由は9月～10月上旬に花、その後地上部は枯れ、11月～翌年4月まで葉を出して栄養分を地下部にため，その後9月まで休眠状態にあるからです。このように多くの植物が葉を落とす冬に栄養分をためて、春から夏の間は“寝て暮らす”という生活をしています。

また、多数の花を咲かせますが、種子は作られず、球根で増えます。　（安嶋　隆）

ちょっとひといき「パティスリーナチュール」

幡町の住宅街にある、かわいらしいお店「パティスリーナチュール」。のぞみ幼稚園と同様に、10年目を迎えました。幼稚園の式典の最後に配られたお菓子はナチュールさん作。子どもさんたちが通った思い出の幼稚園への思いをこめて作ったそうです。　（武藤　千絵子）

記念式典で配られたお菓子

- 〒313-0025 常陸太田市幡町2015-4
- Tel 0294-74-1645
- 営業時間　火～金曜日 10:30-18:00
- マカロン 130円／リンツァートルテ 600円／ギモーブ 120円（消費税別）
- facebook ページ https://www.facebook.com/nature.hatasome

常陸太田の地名話 ～16～

千寿（せんず）　【常陸太田市千寿町】

入千寿集落の北東端に元金砂神社が鎮座している。大同元年(806年)創建と伝えられ、大己貴命を祭神にしている由緒ある神社である。この神社境内に千手観音堂があり、ここの地名「千寿」と深くかかわっているという。天保13年(1842年)以前の千寿村は千手村と記していた。「千寿」とは、千手観音が表す意志や覚悟を意味するといわれ、人生の中で千回ほどいいこと、幸せなことがあるように･･･との人々の願いを込めて名づけたと言い伝えられている。　（川松　博）

地名と深くかかわる千手観音堂

＜参考文献＞「新編常陸国誌」「茨城県地名大辞典」「金砂郷村史」

新太田点描 8

医師・農政家　高野昌碩（しょうせき）

またゾロ今回は、前回に名前だけふれた高野昌碩を登場させることにした。

高野昌碩は宝暦十年（一七六〇）に太田町で生まれた。祖父と父は共に医業を営んでいたので跡目を継いだ昌碩は三代目ということになる。諱を世龍、字を子隠と称し、陸沈と号した。通称名は文助、医師名を昌碩と云った。

安永四年（一七七五）十月、昌碩は木内玄節の父玄孝（春伯）の紹介で水戸藩医 原南陽に入門しているが、昌碩の母は木内家から嫁いで来ているので玄孝とは伯父・甥の間柄ということになる。この時の入門書き上げによれば、諱を鳳、字を伯翼と名のり、陽州と号していたので、その後に前述のように改めたのであろう。

また天明四年（一七八四）に玄孝の子玄節は、昌碩が紹介者となって南陽の門人になっているが、昌碩と玄節は従兄弟同士ということでの由縁であろう。太田町と小目村、地域は隔たっていても同じ医者の家系同士で縁戚関係にあり、その交遊と信頼は厚かったものと思われる。

天明五年（一七八五）、向学心の強かった昌碩は江戸に赴き、名医と評判の高い医師のもとを各所に訪ねては教えを乞うなどして勉学に励み、その後に帰郷し地元で医業に従事している。

ところで昌碩は、寛政二年（一七九〇）七月、寛政三奇人の一人高山彦九郎の訪問をうけたり、太田地方を知行し太田に屋敷を構えていた家老中山備前守信敬に招かれて「論語」や「大学」を講義するなど儒学についても深い学識を持っていた。そして翌三年には、学問及び医業出精により藩主への御目見得格となっている。

寛政四年（一七九二）三月、昌碩三十三歳、さらに医業研鑽のため京都に赴き名医と評判の高かった荻野元凱に入門している。この遊学中に京阪地方の名所・旧跡を探訪し、また著名な学者や文人等を訪ねて交遊を重ねるなど学問・知識の吸収に努めている。同六年帰郷。

翌寛政七年（一七九五）、昌碩は友人木村謙次ら四人と東北仙台地方を旅しているが、ここではおそらく三奇人の一人 林子平と面会したのであろう。また、寛政八年には宇都宮住のやはり三奇人の一人 蒲生君平が来訪しているが、昌碩は君平と何を話題にしたのであろうか。

この頃から昌碩は、寛政三奇人や謙次の影響からか、本業である医業よりも水戸藩の政治形態や農村政策、農業施策に強い関心と関わりを持つようになるのである。

寛政十年（一七九八）、昌碩は水戸藩から「五人扶持、格式小十人組上座」に取り立てられて藩士に組み入れられている。続いて翌年には更に昇進して「格式馬廻組」となり郡奉行に抜擢され、奉行所のあった八田（常陸大宮市）陣屋に赴任している。

しかし残念なことに、赴任後まもなくして病に罹り、享和二年（一八〇二）六月十五日死去している。享年四十三歳。墓は玄節と同じく酒門の共有墓地にあり、墓碑銘の撰文併びに書は彰考館総裁の立原翠軒が認めている。

なお、昌碩の著作としては左記のものが確認されている。

◎芻蕘録　一冊　寛政三年
◎西遊雑誌　四冊（内、一冊欠）寛政六年
◎富強六略　一冊　寛政十一年
◎籠田の水　一冊　寛政十二年

（付記）昌碩の号は「陸沈」であるが、これも調べてみるとなかなか意味深いものがある。

序でながら左の昌碩肖像画（部分）は、かつて市内の某家に所蔵されていたが現在は所在不明となっている。

（吉成英文）